
ハロワいろいろ

imaiwa

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

ハロワいろいろ

【Nコード】

N6283Q

【作者名】

i m a i w a

【あらすじ】

ハローワークの人間模様。

俺はハローワークへやってきた。

長年働いていた印刷会社の営業を首になって、当等、俺も無職の仲間入りをしたのだ。

だが、いつまでも家でだらだらもできない。

実家住まいではそれは許されない事だ。

毎日のように、親の非難がましい目が無数の槍のように突き刺さる。

外に出た方が、精神的にも気持ちが楽だ。

それに失業給付もいつかは切れる。次の仕事をなんとか探さなければ。

カップめんで昼食を済ますと、寒風ふきすさぶ中、現チャリでハローワークまでやってきた。

ヘルメットを脱ぐと、頬を凍てつくような風が撫でる。

「あの一、ちよつといいですかー」

黒いリュックサックに手袋をしまっていると、小奇麗に髪を後ろでまとめた、20代前半と思われる若い女性が声をかけてきた。

保険営業の勧誘のねーちゃんだ。

「ちよつとだけでいいんです、お時間いただけませんか？」

毎日毎日ハローワーク前で自分のノルマをこなすため、カモを求めて声を掛けるのだ。

保険営業はノルマがきつい。

向いていない人間は長くは留まらない世界だ。

まー大変な仕事だとは思うが、こっちはそれどころじゃない。なんてたって無職だ。

いちいち相手をするのも時間の無駄だ。

「あ、急いでるんで……」

俺は彼女の返答を待たずにハローワークの中へ入っていった。

いつものように、カウンターに設置されている機械から整理番号のかかれた紙を引き抜く。

そして、検索用のパソコンが開くまで順番待ちだ。

椅子に腰掛けてしばらく待つことになる。

周囲は職探しや、失業給付の手続きに来ている人間でごった返していた。

「くは」

俺の隣に座る大きな体の若い女性は何やら呻いた。

大きな地味な色のコートで巨体を包んでいる。その大風呂敷のような体の合間から電子音と携帯のボタンを押すような音が間断なく聞こえてくる。

流れ来る音楽に耳を済ませていると、彼女が何に熱中しているか分かった。

今流行りのモンハンである。

「うさん、8番の窓口にお越しください」

「ま、待って！ い、行かないで」

何やら人が勘違いしそうな台詞を彼女は吐いた。

どんな状況になれば、モンハン（モンスターハンター）やっててそんな台詞がでてくるんだろう。

待っている間暇なので、ついつい余計な忖度をしてしまう。

「く、はっ、う」

激しい運動でもしているかのように、喘ぎ声を上げる彼女。

大きな山のような体がボタンを押すごとに大きく震動していた。

「なにを、いいかげん、死ね……」

彼女から物騒な言葉が漏れ出す頃、俺は手持ちぶたさに、バッグから小説を取り出した。

「くさん！ 8番の窓口……」

同じ名前の人間を呼ぶ放送が室内に響き渡っている。

いないんだろうか？ 該当者は外に出て行ったのかもしれない。

なんとなく、見ず知らずの人間の居場所を気にしながら小説の頁を捲りかけた時、

「ああ、ちょっと待ってください！ 今セーブ中なんです！」

隣の彼女が大きな声を張り上げた。

あ、あんただったのか……

「くさん！ 8番の……」

「ああ、もう！ もう少しやねん！ うるさいなあ！」

彼女は焦りを顔に浮かべながらも、手からゲーム機を離せないように、

どっちつかずのまま、ぶつぶつと不満を並べ立てている。

な、何しにきてるんだろう……

番号を呼ばれた俺は、カウンターで番号札をもらおうと指定のパソコンの席についた。

57番だから……3列目か。

時間的に混むのか、今日はパソコンコーナーにも人がぎっしり詰まっている。

「父ちゃんく！」

閲覧者の間を縫うようにして歩いていると、キャップをかぶった小学生が父親らしき人間の肩に後ろから覆いかぶさった。俺は席を探す振りをして、彼らを観察していた。

「悟、走ったらあかんで」

「ごめん」

父親に言われて、周囲に気遣うような素振りを見せる少年。

銀縁眼鏡をかけた父親は、検索画面を眺めている。

「仕事あったく？」

「いやいや、そんな簡単には……でもすぐに見つかるさ」

苦笑いを浮かべながらも、彼は肩に顎を置いている少年に強気に言い放つ。

さすが一家の大黒柱。

父親が頑張っている姿は子供にとって何よりの誇りだ。

なんだか死んだ父親の姿と重なる部分があつて感傷に浸ってしまふ。

「父ちゃんの邪魔しちゃあかんよ！」

そのすぐ隣で派手な化粧をした水商売風の女性が、子供を窘める。少年の母親だろうか。なんだかこの父親の奥さんにしては……無粋な想像はやめよう。

「ちよつと遊んでくる」

そう言い放つと、少年は狭い通路を縫うように走っていった。

家族揃つてハローワークへやってきたのか。

職探しで殺伐感が漂う検索コーナーで、ほのぼのと一面を見たきがした。

しかしないなあ……

地域を絞り、営業で検索をかける。

この頃はあまり分野を絞らず、大まかな区切りで探していた。

ここへ来るようになって3週間は過ぎている。

それまで、何度か気になる企業に応募して、二度面接に行ったがあまり手ごたえはなかった。

この不景気では一度離職すると、すぐには希望の条件にあった仕事は見つからない。

最初の時より、随分妥協を重ねて選んではいるが新しい職場を選ぶのは並大抵のことではない。

「営業くちよー面白そうじゃん！」

左隣の席の男性がよく通る高い声で独りごちた。

「やってみれば」

いや、独りではないようだ。

彼の腰掛けるスツールの陰から、黒いスカートに包まれた丸みを帯びたお尻が。

俺からは椅子の陰で死角になっていて気づかなかった。

「給料高いの？」

「結構いいぞ」

彼女と思しき女性が彼の腰に腕を回す。

テナガザルのような細くよく日焼けした腕には黒い蛇のタトゥーが刻まれている。

派手な女だなと思いつつ、カップルで職探しに来ていることを羨ましく思う。

俺もまともな仕事についたら、彼女を……と、皮算用してる場合じゃないな。

一回の限度時間の30分がきて一回待合室に戻る事にした。

「お、高石さん、今日も仕事探しですか」

「ええ、まあ……」

突然、俺に声をかけてきた男性は城川氏だった。

眼鏡をかけスーツで身を固めた彼。

ここへきて、間もない頃、気まぐれにかけた言葉から時々声を交わす仲になっていた。

彼も俺と同じく営業畑の人間だ。

「どうですか？ 何社か回りましたか」

「ええ、ですが全敗ですわ」

「難しいですね、私もさっき面接いつてきたところなんですよ」
そう呟いた彼の顔は、あまり明るいものではなかった。

「まあ、今日もバリバリ探しますよ」

前向きな彼の発言と澁刺とした笑顔に、俺は元気をもらったような気がした。

「じゃ、僕ももう一度」

重い腰をあげて、彼の後に続き、再び番号票を受け取り戦場に向く。

「今日も2件、面接の予約取りましたよ」

「僕は一件です」

一件とれただけでも、俺にしては上々だった。

彼は今日も2件も回ってきて、又今週中に2件回るようだ。

その精力的な活動には頭が下がる思いだ。

と――

「城川さんやないか」

「おお、明石さん！」

彼に突然声をかけてきた、40台後半と思しき男性。白石さんというらしい。

濃紺のスーツ姿にごま塩頭を短く刈り上げている。

どうやら俺の職安の友城川氏と仲が良いようだ。

「どうや、調子は」

「ぼちぼちでんなー」

なぜか城川氏はこの男性には頭を低くして接している。そういえば、どこことなく品格があるような。

話を拾っていると、同じ無職の人間ではありそうだが。

「こちら、高石さんです」

「え、あ、どうも……」

俺は咄嗟に紹介を受けて、明石氏と握手する。

日焼けしたどこか貫禄を漂わす彼に、こちらも低頭して笑顔で応じた。

「あの人とは仲良いんですか？ えらい丁寧だったけど」

「いやあ、まあ、社交辞令というか」

話によると、彼はこの職安で結構な有名人らしい。

「ほら、あそこ」

待合室から離れた場所にある喫煙室でさっきの明石氏が真ん中に鎮座し、その周りを幾人かの取り巻きが囲っているのが見える。

「偉い人気ものですね」

「いや、彼、この常連だからね、何せ……」

「どうしたんですか？」

城川氏は何か含み笑いをしながらも、言いにくそうにしていた。やがて、俺の耳元に口をもってきて、声を落として話した。

「彼ここじゃ……気さくに誰にでも話しかけるので、ここに来る人の間では有名なんですよ」

「なるほど」

ただの気さくなオジサンってだけなのか。

それにしてはさっきの城川さんの態度はまるで崇拝にも似たような。

俺が得心がいかず、黙っていると、

「ただ、それだけじゃなくって……彼仕事を転々としながら、なんと15年も雨の日も風の日も毎日ハロワに通い続けているらしいんです。だから、彼を応援するような、崇拝するような輩がいっぱいいましてね。まあ、この顔みたいなものなんですよ。職安の明石って呼ばれてるくらいで」

「はー15年選手ですか……」

なんだか呆気にとられてしまった。

「僕達もうかうかしてられませんか」

「ですなー」

俺は明石の横顔を見ながら尻に火がつく思いをした。

明日もハロワ行くぞ！

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n6283q/>

ハロワいろいろ

2011年2月4日00時10分発行